



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 〈翻訳〉 Poema de Mio Cid(邦訳)(I)                                                        |
| Author(s)    | 中岡, 省治                                                                              |
| Citation     | Estudios Hispánicos. 1973, 3, p. 25-56                                              |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/93590">https://hdl.handle.net/11094/93590</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# Poema de Mio Cid (邦 訳) (I)

中 岡 省 治

以下に《Poema de Mio Cid》の翻訳を試みた。イスパニア語を学ぶ者にとって、常に尽くることなき問題の宝庫とも言うべきこの叙事詩は、ローランの歌、ニーベルンゲンの歌、等の作品に等しく、時にはこれらよりも高く評価されているが、未だこの《シッドの歌》の邦訳は存在しない。

“理解の証しとしての翻訳”という言葉があるが、この邦訳に当っては、勿論この様な大それた自負、意図は持ち得べくもない。自分なりにこの叙事詩を読んだという、ささやかな証拠とでもなれば、と考えたい。

この翻訳のテキストには、Poema de Mio Cid (Clásicos Castellanos, No. 24, Edición, Introducción y Notas de Ramón Menéndez Pidal) を用い、Obras Completas de R. Menéndez Pidal, III, Cantar de Mio Cid, Volúmenes, I, II, III, Poema de Mio Cid, facsimil de la edición paleográfica por D. R. Menéndez Pidal, Madrid, 1961 を特に重点的に参照した。

註は最小限に止めたが、その殆んどが上記 Clásicos Castellanos, No. 24のテキストに挙げられたもののひき写しでしかないことをも明らかにしておきたい。

## シ ッ ド の 歌

### 第一部 配 流 の 歌

(この叙事詩の写本の最初の一頁が失なわれたが為、この空白部分を Crónica de Veinte Reyes<sup>1)</sup> の記述を以て補うこととする) 一国王アルフォンソはコルドバとセビリアのモーロ人大守から年貢の取立てを行なわんとて、エル・シッドをつかわしぬ。この時、セビリアの大守はカステイリアのガルシア・オールドニエス伯爵の攻撃を受けぬ。エル・シッド、国王アルフォンソ王の家臣たるこのモーロ人を助けて戦い、カブラの地にてオル

ドニエス伯爵を打ち負し、彼を捕えたり。オールドニエス伯爵、これを大い  
な侮辱と感じぬ。エル・シッドはその貢物を持ちてカスティリアに帰る  
も、国王へのざん言ありて、アルフォンソ王、エル・シッドに流刑を科し  
ぬ—

カスティリアのアルフォンソ王<sup>2)</sup>、コルドバとセビリアの大守が毎年彼  
に支払うべき年貢<sup>3)</sup>を徴せんが為、エル・シッド<sup>4)</sup>をつかわしぬ。セビリ  
ア大守アルムタミスとグラナダ大守アルムタフェールは、その時、大い  
に反目し合い、互いに敵の謀殺を計りぬ。この時又、このグラナダ大守  
アルムタフェールを助け、ガルシア・オールドニエス伯爵<sup>5)</sup>、ナバラのガル  
シア王の娘婿、フオルトゥン・サンチェス、又ロペ・サンチェス……等の  
騎士、夫々にその部下を引率れ、セビリア大守アルムタミスを攻めり<sup>6)</sup>。

ルイ・ディアス、又の名エル・シッド、かくの如きキリスト教徒の騎  
士、その君主たるアルフォンソ王の家臣にして、又貢納者でもあるセビリ  
ア大守にかくの如く襲いかかるを知りし時、これがあやまれる所業と断  
じ、大いにその心を痛めたり。そこで、エル・シッド、攻め来りし騎士達  
皆に書状を送り、アルフォンソ王の家来としての立場からも、セビリア大  
守を攻撃せぬ様、又その領地を荒さぬ様要請せり〔併せて又、この願を容  
れずんば、その貢納者、その家来を助けんとて、主君アルフォンソ王の出  
馬があるやも知れぬことを覚悟されよとも言えり〕。グラナダの大守、彼  
に加担せしキリスト教徒の騎士、エル・シッドのこの書状に一顧だにもせ  
ず、一軍となり多勢をかってその力を合わせ、セビリア大守の領地をこと  
ごとく、カブラ<sup>7)</sup>の城までそのくつわの下に荒しまわりぬ。

この無態なる様を見しエル・シッドは〔キリスト教徒、モーロ人より出  
来うる限りの軍勢をその旗下に集め、セビリア王の領地をその手中に奪回  
せんものと、グラナダ大守に攻撃を加えたり。このグラナダ大守、又それ  
に味方せし騎士共は、エル・シッドとその軍勢がかくの如く攻め来るを知  
り、《エル・シッドに文を送り、彼と一戦を交さんが為、そのセビリア大  
守の領地を離れまじ》との決意を伝えたり。エル・シッドこれを聞きし時、  
これらの邪まなる騎士をこらしむるにしくはなしと考え〕、軍勢を進め、  
これらの者共と一戦を交えたり。この戦い朝もまだ早き時より正午まで続  
き、グラナダ大守に加担せしモーロ人、キリスト教徒の側に多大の死者、

損害を及ぼし、ついには彼らを打ち倒し、敵を潰走せしめぬ。この戦にて、エル・シッドはガルシア・オールドニェス伯爵を捕え〔《その顎ひげひと握りを引き抜き》〕、又その部下の騎士を、その他数え切れぬ程多くの者共をも捕えたり。かくの如く多くの敵兵を捕えし時、エル・シッド、戦場に残せし敵の持ち物、おびただしき財宝を集めんことをその部下達に命じ、これを終えし後、エル・シッドはその兵と共に、戦利品を携えセビリア大守アルムタミスの許に帰り行きぬ。〔このセビリア大守に、又これに仕えるモーロ人に、かって彼らのものでありし戦利の品をことごとく返し与え、これに加え望む物をも与えたり。《この時以降、モーロ人もキリスト教徒も、このビバール生れのルイ・ディアスをエル・シッド・カンペアドール<sup>8)</sup>と呼びしが》、これ正に“戦う人”を意味するものなり〕。

アルムタミス、この時、エル・シッドに多くの貴重な財宝を贈り、又必要なる貢物をも引渡したり……エル・シッドこの貢物を持ち、その主君アルフォンソ王の許に急ぎ帰り行きぬ。〔アルフォンソ王彼を喜び迎え、大いにその労をねぎらい、そのなせしことにこの上もなく満足の意を表したり〕。これが為エル・シッドに羨望の気持ちだくもの現われ、この者達、国王にエル・シッドをざん訴せり……

アルフォンソ王、ざん言を聞き、エル・シッドに大いに立腹し、怒りを覚え、邪なる者の言を易々と信じたり……〔《そこで、書状を送り、その領国を即刻立ち去ることを命じたり。エル・シッド、この王の書状を見るや、無態なる仕打をいたく悲しく思いしが、この命に従うことのみをいさぎよしとせり。その王の領国を立ちのくべく決められし日限、わずか九日<sup>9)</sup>を数うるのみ》〕。

## (1)

〔エル・シッドその部下を呼び集めたり。この部下達も主人と共に配流にいで立たんとす。(Crónica de Veinte Reyes の一部を引続き用い、それに続いて、この Cantar の空白部分を 12 versos で再構成する) —エル・シッドのビバールへの別離(ここからペール・アバットの写本が始まっている)。〕

「《その縁者、家来を招き、アルフォンソ王がその領国から立ちのく様命じたこと、又その日限には九日があるのみを皆に告げ、又彼と行を共にせんとする者<sup>10)</sup>、又この地に残らんと望む者を知らんとす》」

《「我と共に行かんとす者、彼らに神の思召しのあらんこと、この地に残らんとする者、汝らにも我満足なるぞ」とシッドは言えり。この時、甥の内で一番の年嵩の者、アルバール・ファニェス<sup>11)</sup>は、「シッド様、御身と共に我ら行かん、荒野をも、又村、町をも、我らが生ある限り、御身を離るることなからん。御身の許で、われら、馬を、荷駄をその力の尽くる迄走らせ、又われらの財産をも、布衣をもなげうたん。忠実なる家臣として、永劫までも御身に仕えん」と言えり。この時、このアルバロの堅き決意を家来の者皆よしとす。皆の心根に、ミオ・シッドいたく感激したり……ミオ・シッド、ビバール<sup>12)</sup>を出で、ブルゴスをさしてその馬を早めぬ。

かくして、彼、ここにその居城を住む人もなく、後見の人もなく放置せり。》

あふるる涙は激しく頬を伝い、  
幾度となく頭をめぐらせては、館々に目をこらしつ。  
門は開け放たれ、潜門の錠も破れ  
衣桁には衣なく、皮袍も又マント<sup>13)</sup>もなく、  
隼はとまらず、羽支度せし青鷹<sup>14)</sup>の影もなし。  
シッド大きく歎息せし、その悲しみやいかばかり。  
シッド雄々しく、謙虚にいう。

「天にまします主なる父よ、貴き神よ！  
わが流罪は邪なる敵の劃策にて起こりしものなり」

## (2)

(ブルゴスに向う道すがら吉兆現わる)

シッドの一行、時に馬を急がせ、時に手綱をゆるめて行く。

ビバールの城門にて右より左に飛翔せし小鳥<sup>15)</sup>は

ブルゴスに入る時左手に見えたり。

シッド肩をゆすり、頭を振わせぬ<sup>16)</sup>。

「喜べ！ アルバール・ファニェスよ、今は領地を追われ行く我らなれど、

いつの日か、大いなる名誉につつまれ、再びカスティリアの地に帰り来たらむ！」

### (3)

(エル・シッド ブルゴスに入る)

ミオ・シッド、ルイ・ディアス、ブルゴスに入りぬ。

その総勢や、60本の旗じるし<sup>17)</sup>、

彼を見んものと、女も男も群がりぬ。

この地の者は皆その家の窓辺に上り、

溢る涙にその悲しみはいや増すばかり。

誰もが口にせしは唯一つの言葉なり。

「おお、神よ、もし名公と讃えられる主に仕えたらば、賢佐となれしものを！」

### (4)

(ブルゴスの人誰一人として、エル・シッドを迎えるを望まず、童女が彼に言葉をかけ、この地を離る様告ぐるのみ。エル・シッドこのブルゴスの町の外、荒れ地にその陣屋を張るにしくはなし)

心には、シッドを饗応せむとは思えど、誰一人としてなし得ず、

アルフォンソ王がシッドへの怒り激しきゆえなり。

日暮、ブルゴスに王よりの警告と、

王印にて嚴封されし明命来たる。

「ミオ・シッド、ルイ・ディアスにはゆめ宿を供すべからず。

若し命に反しこれを行なわむ者は、  
その財物はおろか、両の眼さえも  
又その生命までをも失なわんことを<sup>18)</sup>、  
加えてその 靈魂と肉体の救いも 得がたきことを、勅令として知らしめ  
よ」とあり。

人々の悲しみ筆舌につくし難く、  
ミオ・シッドより身にかくし、彼に声かけることすら能わず。  
かの勇者彼の常宿に向いぬ。  
その門口に着きたるも、扉は閉ざされしまま、  
アルフォンソ王の嚴命を恐るるがあまり、不本意にも人々の断行せしこ  
となり。

それ故、踏破せざれば、さらに開く気配もなし。  
ミオ・シッドの部下、大声に呼び立てしが、内より何の応答もなし。  
ミオ・シッド馬を駆りて、その戸口に近ずき、  
鎧より足はずし、扉を大きく蹴ったれど、  
微動だにせず、依然たり。

この時、九才の童女あらわれ、シッドの目前に立ち止りていう。

「よき時に帯佩せし勇者、聞き給え！  
王それを禁じたり、昨夜王より命が届きたり。  
嚴酷なる警告と王印にて密封されしもの、  
それ故、いかなりとも扉開けず。

若しこれに背きたるとき、財物、家はおろか、われらの眼の玉さえ失な  
うべし。

シッド様、われらの被りし禍かくの如く、君は何物をも望み得ず。ただ、  
ひたすらに神の御加護が君の上にあらむことを、聖なる徳の御加護の大  
ならんことを祈念するのみ！」

かく言い終えし童女、家に戻りぬ。

かくて、エル・シッド、王の恩寵を受けられざることを悟り、  
その家を離れ、ブルゴスを足早に駆け抜け、

サンタ・マリア大聖堂<sup>19)</sup> に着き、馬を捨て、  
ひざまづき、心より神に祈る。

祈り終るや、直ちに、馬上の人となり、  
城門を出で、アルランソン河を渡りて、  
ブルゴスに程近き河原に陣をかまえ、  
陣幕を張り、下馬す。

ミオ・シッド、ルイ・ディアス、好時に帯佩せし者、  
今や村の誰一人として家に迎えむとする者なく、河原に夜を休息す。  
屈強の者共、シッドをとり囲みたり。  
かくして、あたかも山中にあるが如くミオ・シッド憩ふ。  
ブルゴスの町にては何一つ購うこと禁じられ、糧さえも求められず、シ  
ッドに一日分の兵糧を売らんとする者となし<sup>20)</sup>。

## (5)

(マルティン・アントリネス、エル・シッドの為食糧をたずさえブルゴ  
スより来たる)

ここに誇り高きブルゴスの人、マルティン・アントリネス<sup>21)</sup> あり。  
彼、ミオ・シッド及びその部下にパンとブドウ酒とを供せり。  
これらも買入れしものならず、彼の貯えしものなり、  
種々の食糧もて、シッドの部下等をして十分に満足せしむ。  
それを見て、行ない正しき勇者シッド、又その部下の者達、大いに喜べ  
り。

マルティン・アントリネスの言う。それを聴聞あれ。

「おお、勇者シッド、好時に生をうけし人よ！

今夜はこの地に休をとり、明日出立せむ。

われ、君になせしことにより誹りを受け、

アルフォンソ王の激怒を受けむこと必定。

若し、われ君と共に、命もてこの地を逃れ得れば、

いつの日か、王の庇護を受くこともあらむ。

たとえその日が来ぬとて、後に残さん物には何の未練もなし。」

## (6)

(困窮の極に達せるエル・シッド、マルティン・アントリネスの策略を

用う。砂を詰めし櫃の計りごと)

よき時に帯佩せしミオ・シッドいう。

「マルティン・アントリネス、汝勇敢なる騎士よ！

若しわれに命あらば、俸秩を倍にもせむ。

金、銀を使い果せし今、

われ何物も持たざること、よく承知のはず。

連袂せるこの部下共のために要すべき金銀を、力尽くにも取得せん。

尋常なる手段にては一文を望むことも価はず。

汝の言を容れ、二個の櫃を造りて、

それに砂を詰め、充分に重たうし、

又その櫃には鞣の飾革を張り、

釘もて強固にとめるべし。」

## (7)

(ブルゴスのユダヤ人二人より金を得んがため質物となるべき櫃のくだり)

「赤き絵模様の施されし鞣革を張り、金張りの釘で牢乎と留められし箱。  
汝、アントリネス、直ちに、出立せよ、ラッケルとビダス<sup>22)</sup>を探し出で、  
かくの如く伝えよ。

『ブルゴスにてわれ一切の購を禁じられ、王の震怒にふれし今、

その重きが故に、わが財産をも携行し得ず、

適切なる値にてわが財物を入質せむ。』

何人の目にも留らぬ様、夜の闇にまぎれて運ぶべし。

神よご照覧あれ、神の従者聖徒とともに。

他に方策とてなく、かかる仕業もげに本意なし」

## (8)

(マルティン・アントリネス、ブルゴスに戻り、二人のユダヤ人を探し

求む)

マルティン・アントリネス、この依頼を直ちに実行せんとす。  
ブルゴスの町をくまなく歩き、ユダヤ人街<sup>23)</sup>に入り、  
急ぎ、ラッケルとビダスを探ね行きけり。

(9)

(マルティン・アントリネスとユダヤ人との商談。ユダヤ人はエル・シ  
ッドの陣屋に赴き、砂の櫃を運び去る)

ラッケルとビダス一つ所に二人してあり、  
彼らの儲け、財産の勘定の最中。  
拔かりなき騎士マルティン・アントリネス、秘かに近ずきて言う。  
「ラッケルとビダスの二人よ、わが親愛なる友人よ、  
二人のみに秘かに話したきことありて来たりしものなり」  
直ちにこの三人、人目なき所に行きぬ。

「ラッケルとビダス、まず友としての誓いの印にわれに握手されよ<sup>24)</sup>。  
何人にも、モーロ人にもキリスト教徒にもここにわれの来たりしこと口  
外すべからず。

常に方々には利あらむよう謀りしわれ、この言に従わば断じて貧せざる  
べし。

エル・シッド 国王の年貢徴収に行きし際、  
大いなる財物を過分に徴収し、  
その内値打あるもの数多着服せしが、  
かかる故、畢意罪科を負ひぬ。  
シッド今、黄金の詰まりし櫃二棹持てり。  
二人も既知の如く王 シッドの所業に立腹したまえり。  
これ故、シッド財産も家も又宮殿をも失なうに至りぬ。  
その黄金の櫃持ち運び得ず、さりとてこれを放置せば、事の露見も早か  
らん。  
それ故シッドその櫃を汝らが手に預けんとす。

その黄金を担保に適当なる金子をシッドに貸さんや。  
櫃を受取り安全なる場所に保管すべし。  
汝ら両名の誓いて約すべきは、  
向後一年兩人共ゆめそれを開かざること。」  
ラッケルとビダス密談の後、  
「われらいかなる取引にも幾ばくか儲利を欲す。  
シッド様につきてはよく知れり、莫大なる利得ありしことも、  
又モーロ人の地に入りて彼らより多額の金子を手中にせしことも。  
金銀を持てる者その眠りも安らからず。  
この櫃もわれらが物とし、人目なき場にかくし置かん。  
さて、ミオ・シッドは何程の金子を欲されるか、  
又今年に何程の利息をわれらに下さるか、聞かされよ。」  
マルティン・アントリネス泰然としていう。  
「ミオ・シッドはそれ相当の額を望まるのみ、  
その財宝を汝らが手に担保とする代償として、僅かの金子を欲さるのみ。」  
財をも家をも捨てエル・シッドが許に集まり来し騎士達の為に、  
六百マルコの用立てを望まれたり。」  
ラッケルとビダスいう。「喜んでその金子調達せん。」  
「汝らも知らん、既に日は暮れんとし、エル・シッドも急かるべし、  
かの六百マルコの金子、早々に渡されよ。」  
とマルティン・アントリネス。  
これにラッケルとビダス答う。「取引きはまだ為されず、  
初めに担保を受け、その後に金子を支払うがこれ商の常道なり。」  
それに対しマルティン・アントリネスいう「此方にも異存なし。  
さて兩人かの名高きエル・シッドが許に来たれよ。  
かくの如く一件落着したりし上は、  
われらも汝らがその櫃を持ち運び、安全なる場に移すに力を貸さん。  
この一件、誰の目にもとまらぬ内に。」  
ラッケルとビダス、「承知いたした。  
その櫃此処に来りなば、すぐさま六百マルコを渡すべし。」と言う。  
マルティン・アントリネス直ちに馬に乗り、

ラッケル、ビダスを伴ない嬉々として行く。  
一行橋を通らず、河中を渡りしは、  
誰にも見とがめられまじと思うが故なり。  
さて今やこの三人、名高きエル・シッドが陣屋に着きたり。  
天幕に入るや、この金貸し二人エル・シッドの手に口ずけの礼をなす。  
ミオ・シッド、微笑を浮べ、ラッケルとビダスにいう。  
「よくぞ来たりラッケルとビダス、兩人われを忘れたるか。  
われ主君が怒を受け、今この地を去らんとす。  
汝ら兩人にもわが戦利品の一部をも分ち与え、  
汝らこの世に生ある限り、汝らの財の減ずることのなき様取計らわむ。」  
ラッケルとビダス再びミオ・シッドが手に口ずけす。  
マルティン・アントリネス、すでにその取引とりまとめたり。  
その詳細、櫃を担保とし六百マルコの融通を受け、  
片やユダヤ人金貸しが年末まで櫃に指一本触ることなく保管するもの  
なり。  
この旨をエル・シッドに保証し、誓いをも立てぬ。  
この二人誓を破りて櫃を開きし時には、  
ミオ・シッド一文の利息をも支払わざるべし。  
マルティン・アントリネスいう。  
「さて早々に櫃を馬に積み込め。  
ラッケルとビダスよ、それを持ち去り、安全なる場所に保管せよ。  
われ汝ら二人と共に行き、求める金子を受取らん。  
ミオ・シッド、夜の白らむ前にこの地を出立せんとすればなり。」  
この櫃を積み込みし時の喜び、おのおの方、ご想像あれ。  
屈強なる武者なれど、皆それを頭上に差上げ得ぬ程の重さにして、  
これを知れるラッケルとビダス、その財宝に心もおどるばかり、  
その生ある限り大金持となれること信じて疑わず。

(10)

(ユダヤ人金貸しとエル・シッドとの別れ。マルティン・アントリネス、

このユダヤ人と共にブルゴスに赴く)

ラッケル、ミオ・シッドの手に口づけをし、かくの如くその謝意を表したり。

「雄者のシッド様、よき時に帯佩したまいし君！

今や君カスティリアを出で、異境に赴かんとす。

これぞ君が運命、君が戦果も高からん。

ここで今、モーロ鞆しの誉れ高き朱色の皮袍を、  
かの地よりわれに賜わらむことを君に乞ひ願いたし<sup>25)</sup>」

「喜んで、その願い聞きとどけん。

彼の地より汝らの許にそれを持ち帰りたればよし、さもなくば、  
その櫃よりその金子を差引くがよし。」

ラッケルとビダスその櫃を持ち運びたるに随きて、

マルティン・アントリネス、ブルゴスに入る。

周到なる注意を払い、二人が住家に着き、

広間の中央に敷物を拡げ、

その上に織目細かき白布を重ねたるに、

一息に銀貨三百マルコを打ち拡げたり。

ドン・マルティンそれを勘定の上、計量もせず<sup>26)</sup>受取りぬ。

ユダヤ人、加えて金貨にて三百マルコを別に支払えり。

ドン・マルティンの従えし五人の騎士、この金子を持ち運ばんとす。

この荷物をその馬につけ終えし時、マルティン・アントリネスいえり。

「ラッケルとビダスよ、櫃は汝らの手に預けたり。

この取引の仲介をなしたるわれに礼金を与えてしかるべし。」

## (11)

(マルティン・アントリネスにより金策なりしシッドその一行を進めんとす)

ラッケルとビダス二人のみ席を立ちて退きぬ。

「彼に佳き賜物せん、彼こそわれらにあの取引をもたらせし人なり。」

マルティン・アントリネス様、誇り高きブルゴスの騎士よ、  
君、かく言わるるも当然のこと、われら君に佳き贈物せんとす、  
具足<sup>27)</sup>と贅をこらせし皮袍と、豪華なるマントを作るに足るものを。  
君に三十マルコを贈らん。

この取引の媒をせし君なればこそ、  
われらが賜物を受けたまうべし、この取引の証人ともなられよ。」  
とは二人の言葉。

感謝と共にドン・マルティン三十マルコ受け取りぬ。

彼その邸を出で、二人に辞別す。

ブルゴスを出、アルランソン河を渡り、

よき時に生れしシッドの陣屋に帰り来ぬ。

エル・シッド、ドン・マルティンを双手を拡げ歓迎す。

「マルティン・アントリネス帰り来りしか、わが忠実なる部下よ！

汝に対しわれからも何か与え得る日の来んことを。」

「勇者シッド様、われかくの如く細心の注意の下に帰り来り、

君には六百マルコ、われ三十マルコ手に入れぬ。

いざ天幕を早々と出立せんや、

サン・ペドロ・デ・カルデニヤ<sup>28)</sup>にて日の出を迎えんがために<sup>29)</sup>。

君が令夫人にまみえん、あの高雅なる人に。

彼所にての滞在を早々に切り上げ、カスティリアの地を離れん。

今や一刻を争うべし、日限の迫りたるが故なり」

## (12)

(エル・シッド馬にまたがり、ブルゴスの大聖堂に上り、別れをつけ、  
聖母マリアの祭壇に千度のミサを約す)

ドン・マルティンの言葉が終るや直ちに天幕は払われぬ。

ミオ・シッドとその家臣達たちまち馬に跨る。

馬首をサンタ・マリア大聖堂に向け、右手を挙げ十字を切りていう。

「神よ、天と地にその御威光を及ぼされる神よ、われ御身に感謝す、  
聖母マリア、御身の慈悲を垂れ給え！

王の不興を受けわれ今やカスティリアを離れんとす。  
生きて再びこの土を踏めるや否やわれ知らず。  
わが出立に際して、聖母マリア様、何卒われに御慈悲を垂れ給え、  
日夜分たずわれに佑助と支援とを賜わらむことを！  
聖母マリア様、若しわれに御慈恵を施され、又われ幸運に遇わば、  
御身の祭壇に豪華なる喜捨を捧げむ、  
この地にて千度ものミサを捧げんことをも約す。」

(13)

(マルティン・アントリネス、ブルゴスの町に戻る)

この高潔なるシッド、悲嘆のうちにこの地を去らんとす。  
一同手綱を解き、馬にむち打たんとす。  
忠誠なるブルゴスの人、マルティン・アントリネスいう。  
「一目心ゆくまでわが妻に会わなん、今後いかにすべきか言いおくべき  
ことあり。  
若し王わが財産を没収せんとて、何の惜しからん。  
必らずや日の出までに君が許に戻らん。」

(14)

(エル・シッド家族に別れを告げんがためカルデニャに行く)

ドン・マルティン、ブルゴスに戻り、片やミオ・シッド馬を早めぬ。  
サン・ペドロ・デ・カルデニャを目指し、その馬を馳る、  
シッドの意のままに伺候する騎士を率いて。  
程なく夜は白み、東天紅く染まらむとす。  
この高潔の士シッド、サン・ペドロに着きし時、  
神の下僕なる僧院長サンチョ神父<sup>30)</sup>は  
日の出を機として、暁の勤行を務む。  
この場には五人の身分高き乙女を従え、シッドの妻ドニャ・ヒメナ<sup>31)</sup>も

居れり。

使徒聖ペドロ、又主キリストに祈りぬ。

「われら一同を導き給う主よ。戦士、ミオ・シッドを守り給え。」

(15)

(カルデニア僧院の僧達エル・シッドを迎える。ヒメナとその娘達エル・シッドの前に姿を表わす)

僧院の入口にてシッドの一行案内を乞い、直ちに用件は伝えられぬ。

おお神よ、僧院長サンチョ師の喜びやいかばかり！

松明と蠟燭をかざし僧達中庭に走り出で、

驚喜し、よき時に生れしエル・シッドを迎えぬ。

サンチョ師いう。

「神の思召しに感謝の言葉もなし、シッド殿、

この僧院に参られし上は、わがもてなし受けられよ。」

エル・シッド答う。

「有難きお言葉、僧院長、御厚意忝なし、

われとわが家臣の為一餉を欲す。

配流の身故君に僅か五十マルコを与え得るのみ、

若し今後われに幾ばくかの命あらば、この倍の喜捨をも為さん。

此の僧院のわれらが為の無要の支出は本意ならず。

ここにヒメナのための百マルコあり、僧院長これを受けたまえ。

何卒今年中ヒメナと娘、そして侍女達を翼蔽されよ。

幼き娘二人をもこの地に残さん、君この二人をも庇護されよ。

改めて、サンチョ師殿、君に女達をも託さん、

わが妻、娘達を何卒守り給え。

若しその金子が費えし時、妻、娘達に望むものあらん時は不足なく与えられよ、伏して侍む。

君の費す一マルコにつき、われ四マルコを捧げん。」

僧院長諸事快く受く。

さて、皆の方々、幼き息女を伴ないしドニア・ヒメナをご覧あれ、

侍女二人、銘々にシッドの娘をその腕に抱きかかえ現われたり。ドニア・ヒメナ、雄者エル・シッドの前に跪き、涙を浮べ、シッドの手に口づけをせり。そしていう。

「われにご慈悲をかけられよ、よき時に生を受けられし、雄々しきシッド様！君、邪悪なる者共の誹りにより配地の憂目にあわれたり。」

(16)

(ドニア・ヒメナその娘が幼くして父の庇護の下になきことを嘆く—エル・シッドその娘に名誉ある結婚をさせんとの望みを吐露す)

「ご慈悲をかけられよ、雄々しき髭武者<sup>32)</sup>のシッド様！  
今君の御前にわれと君の娘あり、  
かくの如く稚く、幼き二人なり。  
又この幼き娘達の許には、われに仕えたる侍女どもあり。  
この地より君が旅立ちは知れど、  
為す術もなく、われら今ここにて君と生きて別るるなり。  
聖母マリア様にかけても願わん、われら何を為すべきかお教えあれ！」  
美髭たくわえしシッド、この時手を伸ばし  
娘二人を腕にひしと抱く。  
二人をしかと胸にかき抱きたるこの父の子を愛しむ様や……  
目に涙を堪へ、悲歎していう。

「いざ、ヒメナ、わが貞節なる妻よ、  
わが心を愛すが如く、われ汝を愛す。  
詮なきことながら、われら今や生訣すべき運命なり。  
われこの地を去り、汝ここに留まるべし。  
願はくば、主の、聖母マリアの御加護ありて、  
わが手にてこの娘二人を娶せんと、  
又われに幸運と幾ばくかの命あらんこと、  
又汝、節操高き妻の汝にも、いつの日にかわが誠を尽さんことを！」

(17)

(百名ものカスティリアの騎士、エル・シッドの令下に加わらんとブルゴスに参集す)

サン・ペドロの僧達この高潔なるシッドに充分に馳走す。

鐘はこの僧院に切なる音を響かせて鳴り渡りぬ。

カスティリアの地に先触れの大声満てり<sup>33)</sup>、

雄者ミオ・シッドが今正にこの地を出でんとの触れ声が。

シッドに従わんとて、己が家を捨てたるも、又財と名誉を棄てたるもあり。

シッドが出立の日、アルランソン河の橋には、

百十五人もの騎士集まりて、シッドと行を共にせんとす。

この騎士達雄者ミオ・シッドの名を口々に求め来たる。

マルティン・アントリネス、この騎士達に合流す。

よき時に生れしシッドの許へと、サン・ペドロに向いて騎士達は行けり。

(18)

(百余の騎士、カルデニアに至り、エル・シッドの家臣となる。エル・シッド朝まだき内にその道を行かんとて準備を整えたり—カルデニアでの暁の勤行—ドニア・ヒメナの祈り—エル・シッドのその家族への訣別とカルデニア僧院長への最後の依頼のことごと—エル・シッド配流の旅に出立す。ドゥエロ河を渡りし時夜となる)

ビバル生れの人、ミオ・シッドがそれを知れる時、

その隊伍が増大し、故にいよいよその兵力強大ならんことを知れる時、

直ちに馬にまたがり、その騎士達を迎えんとす。

彼らの姿が目に入るや、シッド笑みを浮べたり。

カスティリアの騎士達皆シッドの許に寄りその手に臣下の礼たる口づけをなす<sup>34)</sup>。

ミオ・シッド力強くいう。

「神よ、われらの靈魂の主よ、主に心底より願わむ、  
わがため、家を財産を捨てさりし汝らに、  
われ命ある限り、必ず報わんことを！  
汝らの失ないしものを、倍として返さむことを！」  
午餐時に到りても続々隊伍増加す。これを見しミオ・シッドいとも満足  
げに、  
又エル・シッドの許にある者共も歡喜す。  
期限の六日既に過ぎたり。  
あと僅か三日を残すのみ、もはや裕余なし。  
国王アルフォンソ、エル・シッドを監視せよと下命し、  
又期限果ててその地にてエル・シッドを捕縛したりし上は、  
いかに金銀財宝をつまうとも断じて彼を許すべからずという。  
日は没し、夜がその帳を垂れんとす。  
エル・シッド騎士達一同に参集せよと命じ、かくいう。  
「よく聞かれよ、皆の者、決して悲歎すべからず、  
わが持てる金子僅少なれど、汝ら夫々に配分せん。  
汝ら心得よ、今後いかになすべきかを。  
朝も早朝、二番鶏を合図に、  
時を移さず、汝ら夫々の馬に鞍をおけ。  
サン・ペドロにてかの頼もしき僧院長が暁の勤行の鐘をつきて、  
三位一体のミサ<sup>85)</sup>をわれらに授けなむ。  
このミサが終りなば、直ちに騎乗せむ。  
すでに日限も迫り、今こそ長き途へと旅立つ時なり。」  
臣下一同、ミオ・シッドの意のままになさんこと明らかなり。  
刻一刻と更け、やがて夜も明けむとす。  
二番鶏を合図に一同鞍をおく。  
暁の勤行を知らせる僧院の鐘突如鳴り始め、  
ミオ・シッドとその妻教会に行く。  
ドニア・ヒメナ祭壇前の踏み台に跪き、  
身も心も捧げ神に祈願し、  
戦士ミオ・シッドを禍難より守り給えと祈るばかり。  
「栄えある神よ、天にまします父なる神よ、

天と地を造り給い、次に海を造り給いし神よ、  
星と月とを造り給い、そして暖を与えんが為日輪を造り給いし神よ、  
聖母マリアの御身の内にその姿を現じ給いし神よ、  
又その御心によりてベツレヘムにその姿を現わされし神よ、  
羊飼いは御身を祝福し、又御身を讃美し  
アラビアの三賢者<sup>36)</sup>が礼を捧げんが為来たり  
その名を、メルチョオール、ガスパール、バルタサールといえる三人の  
賢者が、  
心より金と香と没薬とを御身に捧げたり。  
御身は又海に落ちしホナスを救い給い、  
地の牢獄に投ぜられしかのダニエルを獅子より救い給い、  
ローマの地で聖セバスティアンを救い給い、  
その冤罪より聖スサナを救い給い、  
この地上を三十二年もの長き間、奇跡を行ないつつ歩まれし、わが心の  
神よ、  
神の思召は到底語りつくせぬものなり。  
水からブドー酒を、石からパンを造られ、  
その御心によりてラサロを甦えらせ給いし神よ、  
ユダヤ人にその御身を捕えさせ給い、  
ゴルゴダと呼ばれしカルバリエの丘にて、その身を十字架にかけられし  
神よ、  
御身と共に二人の盗人が、御身の両側にかけられ、  
その一人は今天国にその所を得しが、今一人はいまだ天国に入らず、  
その時御身は十字架にありても、こよなき慈愛をほどこされぬ。  
ロンヒノスは盲、生来何物も目に触るることなかりき、  
この盲の者、鎗もて御身の御脇腹に一突きするや、鮮血ほとばしりぬ。  
その血は鎗の柄をつたい、その手朱に染りたり。  
その血したたる手を上げ、顔に触れたれば  
たちまちその眼は開き、四方を見渡し、  
すなわち主の神なるを信じ、因りて悪より救われしなり。  
主は墓に入られるや直ちに甦えられ、  
その御心により地獄に降り給い、

地獄の扉を破られ、主に仕えし聖人を救い給えり。  
主よ、御身こそ王の極み、全世界の父なり。  
わが心を捧げて主を讃え、主を信ず。  
今や、わが願いに助力を与え給えと、われ聖ペドロにも祈願すなり、  
戦士ミオ・シッドを神が禍難より守り給わらんことを。  
今われらたとえ生訣すとも、神が再び生きて遭会させ給う様祈らむ。」  
この祈願を終えし時、ミサも又終れり。  
シッドとその一行既に教会を出で、騎乗の人とならんとす。  
エル・シッド、ドニア・ヒメナをかき抱かんとし、  
ドニア・ヒメナ、エル・シッドの手に口づけせむとす。  
あふれる涙に如何にすべきかを知らず。  
エル・シッドその娘二人をあかず見守りて言う。  
「神の御手に、われらの心の父なる神に汝ら二人を託す。  
今われらここに分訣すとも、再会の日を神は知り給うらむ。」  
エル・シッド悲嘆の涙にかきくれぬ、この涙かって見られざりけるほど  
なるに、  
夫々断腸の思いで別れ行きぬ。  
ミオ・シッドその臣下の騎士達と共に馬にまたがらんとす。  
臣下の隊伍を待つこと瞬時、馬首を返し再びかえり見ぬ。  
この時、ミナヤ・アルバール・ファニェス凜々しく言う。  
「シッド様、よき時に生を受けられし君、君の意気やいずこ、  
われらはわれらが道を行くのみ、今この時を考えるは無益のことなり。  
この悲しみも後日必らず喜びに変らむ。  
われらに魂を与えられし神われらを庇護なされむ。」  
エル・シッド再度、僧院長サンチョ師に向いて、  
ドニア・ヒメナとその幼き二人の娘に、  
又侍く侍女達に如何に供奉すべきかを再び語り、  
この報いに褒賞のあらむことをサンチョ師に知らしめたり。  
ここにサンチョ師その姿を現わしたれば、アルバール・ファニェス言  
う。  
「僧院長殿、若しわれらと行を共にせむとする者共来たりなば、  
われらを追行する様、又休むことなくその追行を続けよと告げ下され、

荒野にて、又村にて即刻われらに行き付かむと。」  
一行手綱を解き、馬に跨り始めたり、  
この地を離るべき期限も迫りたり。  
その夜ミオ・シッド、スピナソ・デ・カン<sup>37)</sup>に至りてここに眠りたり。  
多数の者、その夜の内に四辺よりエル・シッドの許に聚合す。  
翌朝、又馬に跨り行かんとす。  
忠節の武士シッド今やブルゴスの地を離れんとす。  
由緒ある町サン・エステバン<sup>38)</sup>の左手を行き、  
カスティリャの国境たるアルコビェリャ<sup>39)</sup>を通り、  
キネア<sup>40)</sup>街道を横切り、  
ナバス・デ・パロス<sup>41)</sup>に至り、この地でドゥエロ河を越え、  
ミオ・シッド、フィグエルエラ<sup>41)</sup>に至り、ここに一夜の休息をとらんと  
す。  
この地まで、シッドに仕えんと四辺より騎士達雲集したり。

## (19)

(エル・シッド最後の夜をカスティリアに眠る一天使この流刑者を慰む)

夜の帳りが下りて程なく、ミオ・シッドまどろみたり、  
その深き眠りにありて、こよなき吉夢を見たり。  
大天使ガブリエル、夢寐なるシッドの前に現われいう。  
「馬を駆って行け、心正しき戦士よ、  
いかなる武士もかかる好機に手綱をとりたることいまだなし。  
汝の生ある限り、汝の志は必ず成就されようぞ。」  
エル・シッド目覚め、十字を切り神に祈る。

## (20)

(エル・シッド、カスティリア国境に野営す)

シッド十字を切り、その身を神に委ね、

唯今見し夢を頗る喜ばしく思いたり。

翌朝一同騎乗せむとす。

カスティリアの地を去るべき日限の最後の日なり，もはや一日の裕余なきものと知るべし。

一行ミエデス<sup>42)</sup>の山地にわけ入り，夜を過さんとす。

左手にはモーロ人の築きしアティエンサの城塔<sup>42)</sup>聳立す。

## (21)

(エル・シッドその一行を点呼す)

いまだ日は高く，沈む兆もなく，

戦士ミオ・シッド一行の点呼を命ず。

いずれ劣ることなき無双の士なる徒歩の兵を除きても，

各々に旗印のつきし長鎗三百本を数えたり<sup>43)</sup>。

## (22)

(エル・シッド，アルフォンソ王に貢納金を払いし，トレドのモーロ人王国に入る)

「一同直に馬に秣を与えよ，そして汝らに神の御加護のあらんことを！

兵糧を食いたきは兵糧を，さに非ざるは馬に乗れ。

これよりわれらあの屹立せる山を越えむ。

今夜こそアルフォンソ王が領地を離るべし。

爾後われらを求めて来む者も必ずやわれらと合流せむ。」

かくして夜陰連山を越え，今や朝となり，

一同尾根を下り行きたり。

高く，鬱蒼と茂れる林の最中にて，

ミオ・シッド小憩と一餉を命ず。

シッド部下に終夜行進したきことを告げ，

一同忠実なる部下として，それを快く領じ，

ことごとく主命を遵守すること言うに及ばず。

晩暮までに再び一行進軍し始む。

ミオ・シッド人目にとまらぬ様、充分に配慮し、  
夜を徹して、休みなく行きたり。

エナーレス河畔なるカステホン<sup>44)</sup>の町に至り、

ミオ・シッド部下と語らい、伏兵を計る。

### (23)

(合戦の計略一不意の攻をうけカステホン、エル・シッドの手中に陥つ  
一先遣隊アルカラに向う)

その一夜、ミオ・シッド伏兵戦を企てまどろむことなし。

この策はアルバール・ファニェスの建議せしものなり。

「お聞き下され、シッド様、よき時に帯佩せしわが主君よ、  
われらがカステホンの町に謀りごとをめぐらし、これを攻略せんとする  
今、

君はわが軍勢より百名を引き連れ、

この地に留まりて、わが軍勢の殿りをかためられよ。

先陣の戦を行なわんが為、われに二百名の兵を貸されよ。

神の御加護と君の佑助の許に大いなる戦果を挙げん。」

エル・シッド答えて曰く、「よくぞ言えり、ミナヤよ、

しからば汝二百人を引き連れ先陣に立て。

その軍勢にはアルバール・アルバレス<sup>45)</sup>とかの勇士アルバール・サルバ  
ドーレス<sup>45)</sup>を、

又かの名高き槍使いの異名あるガリン・ガルシアス<sup>46)</sup>をも加えよ、

又猛き騎士達もミナヤと共に行け。

一同大胆に馬を駆れ、恐れひるみて分取品を失うこともなかれ。

先遣隊の者共よ、皆の者フィタ<sup>47)</sup>を越え、グアダルフエハラ<sup>47)</sup>を通り、  
アルカラ<sup>47)</sup>まで行き、

大いなる戦利品を挙げよ。

モーロ人を恐るるの余り戦利品を後に残すことなきよう。

われこの地にて後部をかためむ、百人の手勢と共に。  
カステホンを手中に収めたらば、われらには大いなる防塁とならんこと  
必定。  
汝ら先遣の者に何らかの危険の生じたる時は、  
直ちにこの殿軍にその旨を知らせよ。  
後の世全イスパニアに名を留むべき援軍を指し向けん。」  
先遣隊に加わる兵士、ミオ・シッドと共に殿軍をかためる兵士、  
夫々の指名も既になされたり。  
黎明が夜のベールをはがし、朝来りぬ。  
ああ神よ、日は正に昇らんとし、えもいえぬ美しき朝を迎えたり。  
カステホンの町では人々起き出で、  
城門を開き、城外に姿を表わし、  
各々が日々の仕事に、又その畑に出でたり。  
皆が町を外にし、城門ことごとく無防備となり、  
かくしてカステホんに留れる者僅かに、  
人々は町を外に四散して行きたり。  
その時雄者エル・シッド潜みし所より姿を現わし、  
町の周囲をくまなく駆けめぐり、  
モーロ人を男も女も残らず捕虜とし、  
その周囲の牛馬をも悉く捕獲す。  
ミオ・シッド、ドン・ロドリゴ城門にまで馬を進め行く。  
その門を守りしモーロ人共、エル・シッドの襲撃を知るや、  
恐れおののき、城門をも守り敢えず、たちまちに遁走す。  
ミオ・シッド、ルイ・ディアス城門より町に入りぬ。  
その手には拔身の剣を持ち、  
手のとどかん限りのモーロ人五人を倒しけり。  
ミオ・シッドかくしてカステホンを手中に収め、金銀財宝を得たり。  
その兵士達も又戦利品を持ち帰り来、  
兵士達その分取品をミオ・シッドに任せ、何の未練をも示さず。  
いざ、先遣の隊に赴きし、二百三人の兵士達に話を移さん。  
躊躇なく彼ら、かの地を駆け巡り、掠奪の極尽したり。  
アルカラまで、ミナヤの軍旗ひるがえり、

この地から踵を返し、兵士達戦利品をもちエル・シッドの許を目指しぬ。

フェナーレス河を溯り、グアダルファハラをも通り、帰り来る。  
彼らの持ち帰りしもの、その捕獲品たるや驚くばかりなり。  
羊、牛等幾群れか、  
又高価な衣裳、その他諸々の財宝も数知れず。  
天空高くミナヤの旗、翩翩と、  
その背後より攻めをかけんとする者唯一人としてなく、  
大戦果を収め、この一隊は帰り来たる。  
既にこの先遣隊一行は、雄者エル・シッドの居たるカステホンに入る。  
エル・シッド城の防備を堅め、再び馬上の人となり、  
護衛の者と共にミナヤを迎えんとす。  
双手を開げ、ミナヤを迎えていう。  
「アルバール・ファニェスよ、帰り来りしか、勇敢なる騎士よ、  
いかなる所に派遣すとも、常に大なる希望をもたらすは汝なり。  
汝の戦利品をわれのと一にし、その内、  
若し望むなら、その五分の一<sup>48)</sup>を分け与えん、ミナヤよ。」

## (24)

(ミナヤいささかの報賞をも欲せず、忠節の誓いを立つ)

「その名も高き戦士の君、われは君に大いなる感謝を捧げ、  
君がわれに分与されんとする五分の一の戦利品につきては、  
かのカスティリアの王アルフォンソがそれを受けなばさだめし喜ばん。  
われその報賞を放棄し、君に信委す。  
今やわれ、天にまします神に堅く誓わむ、  
われ駿馬に跨り、従横無尽に飽くまで、  
あの戦野にてモーロ人と戦いに戦い、  
肘より血のしたたり落ちるとも、  
その名も高き戦士、ルイ・ディアスの面前にて、  
槍をしごき、刀を打ち振り、戦に飽くまでは、

君より一文の褒奨の分与を受けざらんことを誓う。  
わが戦功により価値あるもの君の手中に入らば、  
その分与は有難く受けん。  
しかるに今回の分与につきては、君の裁量に任すべし」

(続く)

Poema de Mio Cid, Estrofas 1—24 (versos 1—505)

〔注〕

- 1) *Crónica de Veinte Reyes de Castilla* と称され、14世紀に編纂されたイスパニア国史の一つである。この *Crónica* と「シッドの歌」との関連の大きさが、Ramón Menéndez Pidal によって指摘されているが、特に、14世紀初頭に、Pedro Abad が作成した写本とはまったく異なったテキストを基としてその内容を散文に変え、*Crónica* 中にとり入れたという点にも大きな意味が認められる。この“配流の歌”の冒頭に置かれた散文の記述も、Menéndez Pidal によって、*Crónica de Veinte Reyes* から抽出され、この叙事詩に付け加えられたものである。もっともこの *Crónica* より抽出された部分も、ラテン語で書かれた *Historia del Cid* からの翻訳であるが、しかしこの部分は、“シッドの歌”の消失してしまった冒頭の個所に、内容的に一致すると Menéndez Pidal は考えている。加えて、*Crónica de Veinte Reyes* がこのラテン語の *Historia del Cid* の一部を翻訳し、それをその中にとり入れた際、その翻訳に、“シッドの歌”の冒頭部分から直接引き出したと思える詳細な記述をも付け加えたのであった。Menéndez Pidal は、このラテン語による *Historia del Cid* の記述に *Crónica de Veinte Reyes* が新たに追加したと考えられる部分を指摘し、当該部分を〔 〕で表わし、“シッドの歌”のテキストで今は消失してしまっている最初の一頁からその *Crónica* の中にそっくりとり入れられたと思える部分をイタリック体―拙訳では《 》―で表わしている。尚、特にこの叙事詩と *Crónica de Veinte Reyes* との関連については、*Cantar de Mio Cid, Texto, Gramática y Vocabulario, Volumen I, págs. 124 y sigs.* を参照のこと。
- 2) 国王アルフォンソ(Alfonso VI, Rey de León y Castilla): カスティリア国王 Fernando I el Grande の第三子、まず最初はレオンの王に叙せられたが、その兄 Sancho II el Fuerte の死と共に、カスティリアをも統治することとなり、Alfonso VI, Rey de León y Castilla (1065—1109) となった。このアルフォンソ六世に就いては、有名な伝説としてサンタ・ガデア(Santa Gadea)の宣誓がある。即ち、このアルフォンソ王は兄、サンチョ王の謀殺に加担したのではないかとの疑惑を持たれていたので、特にアルフォンソ王がカスティリアの王位にも就かんとした時、カスティリア人貴族達は、アルフォンソ王が兄サンチョ王の暗殺に何ら関係なきことを自分達の面前で明らかにするまでは、彼をカスティリア王として受入れぬとの態度を示したが、このカスティリア人貴族達の先頭に立ったのが他ならぬ、Rodrigo Díaz de

Vivar であったと言われている。結局、このカスティリア人貴族の要求通りアルフォンソ王がその誓いをブルゴスのサンタ・ガデア寺院で行なったが、これが、再征服の二大英雄、エル・シッドとアルフォンソ六世との間の終生の確執の発端であったとされている。

- 3) 年貢 (Parias) : 地方豪族、モロー人大守が夫々隸属するキリスト教君主に支払った貢納金のことを言う。再征服が進むにつれてモロー人諸侯はキリスト教徒の君主に貢納金を収め、その見返りとしてキリスト教徒の君主の庇護の下、生活・財産の安全を確保していた。カスティリアの王、フェルナンド一世がこの貢納金をセビリアの大守モタミッドから徴集していたが、これを受継ぎアルフォンソ六世が大守モタミッドからその貢納金を受けたもので、エル・シッドはこの税の取立てに派遣されたのであった。
- 4) Cid : アラビア語 Sidi, Seid, Cid (いずれも主君を意味する) を語源とする敬称であって、11世紀後半以降の記録にキリスト教徒の名前に冠して、例えば《Mio Cid Petrus Roderici de Olea, miles》の様に用いられた形式である。勿論のこと、この敬称を受けたキリスト教徒はモロー人と混住したか、或は又モロー人の家来をかかえていたことが想像される。Rodrigo Díaz de Vivar の換称としての Cid, el Cid, mio Cid は、1344年刊行の Crónica General de España, 又 Crónica Particular del Cid の記述によれば、Rodrigo Díaz de Vivar の家来であったモロー人大守達が国王 Fernando I el Grande (在位期間1035~1065) の面前で Rodrigo Díaz を《mio Cid》と呼んだことで、Fernando 王が、以後は《Ruy Díaz mio Cid》と名乗る様 Rodrigo Díaz に命じたことに端を発すると言われている。この記述は大いに真憑性を持つものと考えられる。というのは、Cid との名称はまず最初はモロー人の間で Rodrigo Díaz に対し用いられたのは言うまでもないことで、この後、叙事詩に於いて最も頻繁に用いられる名称となり、最終的には Cantar de Mio Cid の中で固有名詞的に固定した敬称となったと推論出来るからである。ラテン語で書かれた Poema de Almería に於いても、mio Cidi saepe vocatus との一節があるらしい。
- 5) ガルシア・オールドニェス伯 : el conde Garçía Ordóñez : この叙事詩では常にエル・シッドの enemigo malo (仇敵) として、エル・シッドに対立する一勢力の中心的な人物である。アルフォンソ六世にあくことなくエル・シッドをざん訴し、ついには彼をその宮廷より追放するのに成功したばかりか、カリオンの二皇子 (los Infantes de Carrión) の味方としても、エル・シッドとはまったく相容れない存在であった。歴史的に見ても、このオールドニェス伯はアルフォンソ六世の膝下で重要な役割を果たしたものと考えられ、1077年には Nájera の領主に、1094年には Grañón の領主に任ぜられているとの記録もある。又かつてはエル・シッドと親交があった様子で、エル・シッドがヒメナ姫と結婚する際の結納金引渡しのための保証人として、このオールドニェス伯を指名している程である。しかしこの二人の友情も、セビリアとグラナダのモロー人大守の確執の中にまき込まれた結果、特にエル・シッドがオールドニェス伯の Cabra 城を攻略し、これを陥した時に消失することになる。
- 6) 当時、キリスト教徒の騎士であっても、その主君の宮廷を放逐された様な場

合、又時には単に武者修業的な意味から、イスラム教徒の太守に加勢し戦場に出たり、臣下としてその太守に仕えるなどの現象も稀ではなかった。この武勲詩の主人公エル・シッドも、アルフォンソ王の宮廷を追われた直後には、武勲詩は触れてはいないが、サラゴサのアラビア人大守に仕えたということもあったらしい。

- 7) カブラ (Cabra) : コルドバ県に現存するカブラの町のことで、ここにはかつてオルドニェス伯の治める城塞があり、エル・シッドはこの城を攻略し、オルドニェス伯を捕えたものと考えられる ; ……en el castiello de Cabra (3287)。
- 8) カンペアドール (Campeador) : エル・シッドにのみ用いられる特徴の形容詞であるが、その語源及び意味の点で、特に後者に関しては多くの説が立てられている。この叙事詩の中での意味、“戦士、勝利者”の他に、この語は“国王の旗持ち、旗手”を意味すべきものとか、又は“戦を始める前に、敵方の筆頭の武者に挑戦するのを第一の職務とした騎士”とする説もある。しかし、本文の記述はこの特徴形容詞が如何なる理由で、エル・シッドに冠されるようになったかの一応の説明にはなろう。
- 9) 配流の刑 : 中世初頭にあつては、追放の刑を申し渡された騎士は、その君主の領地を立のくのくに9日の猶余期限を持つのみであった。これが13世紀には30日にまで延長される様になったと言われている。
- 10) 配流の刑を受けた騎士を主人とする者達はその主人たる騎士に同行してその領国を出で、その主人が生活の手段を確保するまでは、彼と行を共にせねばならない旨が、Fuego Viejo de Castilla に定められていたと言われる。
- 11) アルバール・ファニェス (Albar Fáñez) : 別名ミナヤ (Minaya) と称され、エル・シッドの片腕として、《valiente lanza》, 《mi diestro brazo》とエル・シッドからも呼ばれ、戦いに於いても、又対外折衝の面でも、非常に重要な役割を果たした人物である。この人物の存在は、当時の記録によって、1097~1107年の間 Zorita の町の代官として確認されるが、この史実は、Minaya Albar Fáñez, que Çorita mandó (735) の記述とも一致し、又この叙事詩中に見られるエル・シッドの甥との記述も諸資料から確認されている。
- 12) ビバール (Bivar) : エル・シッド出生の地で、ブルゴス北方10キロに位置する一村落である。
- 13) 皮袍 (piel o pelliçón) : いたち、兎或は子羊の毛皮を材料とし、外側には絹を張り、袖巾のゆったりとした、半オーバ的な外被を言う。普通は騎士の衣裳の一つで、brial と呼ばれる短かい武者ばかまの上に着るものとされた。マント (manto) : 騎士のみの用いた外被で、前述の皮袍の上に、特に右肩上でその端々を結え、かぶることになっていたと考えられる。これもいたちの皮とその他の毛皮で裏張りがしてあった。尚、この pelliçón と manto に就いては Clásicos Castellanos, No. 24, págs. 91—94 にその絵図が挙げられている。
- 14) 羽支度をせし青鷹 (adtores mudados) : 狩猟用として馴らされた猛禽類のことを、この叙事詩では falcones e adtores としたが、特に毛換えという生命の危険を伴う時期をすでに終えたこれ等の鳥類は大いに珍重されてい

た。

- 15) 若しある人が旅に出んとする時、その旅人の右手に小鳥が飛ぶのを目にしたら、これはその旅の幸先が良いことの兆で、それとは逆に左手にその鳥を見れば、これは不吉なことを示す前兆であるとする迷信があったが、こういった考え方が中世の騎士の間にはかなり強く根を下していたらしい。
- 16) エル・シッドのこの身振りは前の不吉な兆を払いのけるためのおまじないであったと思われる。
- 17) 旗じるし (*pendón*) : 槍に付ける小旗のことだが、この槍じるしは時には数十人の部下を引率れた騎士の旗じるしをも意味した。従って、必ずしも槍の数と旗じるしの数とが一致するとは限らない。ここではエル・シッドの部下の数は旗じるしを基に数えられているが、普通は単に槍 (*lanza*) の数によって、兵士の数を挙げるのが慣しであった。
- 18) ここには、国王の命に反する者はその領地から追放されるばかりか、その財産は没収され、眼球をくり抜かれるという、当時尚、実際に行なわれていた刑法上の一条項が如実に示されている。アルフォンソ六世はその命を下して、この条項を実際に適用したことがあったと言われている。
- 19) サンタ・マリア (*Santa María*) : アルフォンソ六世が1075年に建立したブルゴスの大聖堂のことで、現在に残る有名な大聖堂は13世紀のものと言われている。
- 20) アルフォンソ六世はブルゴスの町の人々に、エル・シッドに宿を供し、兵糧を提供することを禁じたが、この様な苛酷な、特に追放され、落延びんとする騎士に兵糧の購入を禁ずる様な措置は七部法典や *Fuero Viejo* で固く禁じられていたと言われる。しかし、実際上は15世紀になっても、この様な禁令が国王から出されることもあったらしい。
- 21) マルティン・アントリネス (*Martín Antolínez*) : この叙事詩の中での重要な役割を持つ、ブルゴス出身の裕福な騎士で、エル・シッドに同行せんが為、自ずからその家、財を捨て、エル・シッドと共に配流におもむいた人物である。その実在を証する資料はいまだ一片も見出されていないと言われている。
- 22) ラッケル ; ビダス (*Raquel ; Vidas*) まったく仮空の人物ではあるが、当時のユダヤ人の典型的な人物像として、エル・シッドと砂詰め of 長櫃のエピソードに表われて来ている。このエピソードはエル・シッドに就いては、まったくの創作と見なされているが、金貸しを欺き金を借受ける為のこの種の策略は、中世の他の物語にも頻繁に表われてくるらしい。詳しくは、*Clásicos Castellanos*, No. 24, págs. 28—31 を参照のこと。
- 23) 当時ユダヤ人は町の中に己が好むがままに散在して居を構えることを許されず、常に町の城壁の内部に、しかも又とりでの附近に、或は内部の特定の一区画に居住させられていた。
- 24) 握手をすることは、中世には“確き約束”を意味する一行為と考えられていたらしい。従って、*dar las manos* は *prometar* の意味を持つことにもなる。
- 25) テキストはこの部分 *Beso vuestra mano……* となっているが、人にあること

- を依頼する場合にも、その人の手に口づけをするとの習慣があった。従って、**besar la mano que……**は **pedir que……**に等しい意味を持つこともあった。
- 26) 中世初期、貨幣鑄造の技術が未だ十分に進んでいなかった時には、貨幣一枚、一枚が均質でなかったが為、枚数を計算するだけではなく、その重量を調べ、正確な金額を計上する習慣になっていた。
- 27) 具足 (**calças**) : 騎士がその脚部を防御するが為に付けた、長い靴下状の下袴のことで、中世には報奨金として、この下袴を買うのに必要な金額や、時にはこの下袴そのものが、その勲功者に与えられる習慣になっていたと言われる。
- 28) サン・ペドロ・デ・カルデニャ (**San Pedro de Cardena**) : この名称を持ったベネディクト派修道院を指し、6世紀にゴート族の王テオドリコの王妃サンチャにより建立されたもの。ブルゴスの町から12キロ程の所にあったと言われる。特にこの修道院の教会には1928年までエル・シッドとその妻の遺体が定置されていた。現在それはブルゴスの大聖堂に移されている。一説によればこの修道院でこの叙事詩が作られたとも言われる。
- 29) テキストでは、この部分は…… **i nos cante el gallo=allí nos amanezca** となっている。夜明けの時刻を鶏のときの声を基準にして表わすことが、古くはよく行なわれたらしい。**Los primeros gallos** は真夜中で、**los segundos gallos** は夜の白んでくる朝明けの頃、大体午前3時頃を表わし、**los terceros gallos** は夜が明け、まったく明るくなった時のことを言った。この叙事詩では、**los segundos gallos** のみが用いられている。
- 30) サンチョ師 : **San Pedro de Cardena** 修道院院長として、この叙事詩に登場するが、この人物はまったく仮空の人物であるとされる。当時の上記修道院々長は25年の長きに亘ってこの修道院をおさめ、後聖人に叙せられた **Sisebuto** 師であったことが確認されている。
- 31) ドニャ・ヒメナ (**Doña Ximena**) : エル・シッドの妻で、その人物像や来歴の多くは伝説、ロマンセによって歪曲されてはいるが、その実在は諸記録によって確認されている。アストウリアスの **Diego Rodríguez** 伯の息女で、アルフォンソ六世の姪に当り、この王の仲介でエル・シッドと結婚したとされる。このヒメナの父を **Lozano** 伯とし、この伯爵とエル・シッドとの和解のために、ヒメナとエル・シッドが結婚したとするのは、まったくの創作であると考えられている。
- 32) テキストでは **barba tan conplida** (又となきひげをたくわえし武者) となっている ; 274) にも同じく **barba vellida** (美事なひげをたくわえし武者) とあるが、この叙事詩ではいずれもエル・シッドに関してのみ用いられ、エル・シッドを特徴付ける語句である。
- 33) カスティリア地方にエル・シッドを流刑とした旨の布令が回ったので、本来のエル・シッドの家来の他に、彼と共にカスティリアをい出んと自ずから望んだ騎士も現われた。しかし、これ等の騎士は、エル・シッドの家来ではないということで、当然王の不興を受け、その家、財産を没収され、名誉を剥奪されることになった。

- 34) この場合の《その主人の手に接吻をする》ことは主従のかためを結ぶための作法であった。特に自ずから望んである人の家臣にならんとする騎士は、その主人たらん人の手に接吻をして、服従の誓を行なう慣習となっていた。しかし、この主従の誓いはあくまでも一時的な性格しか持たなかったと言われる。
- 35) *Misa de Santa Trinidad* (三位一体のミサ) は当時では、この上もなく有難い誓願ミサであって、普通大事を行なはんとする前に、夫々の日に指定された本来のミサに代えてよく行なはれたと言われる。
- 36) 若しこの東方の三賢士の具体的な名称が後世の人の手で、この叙事詩の原典に追加されたものでないとすれば、この叙事詩はヨーロッパの韻文の中で、最初にこの三賢者の名称を挙げた作品の一つとなると言われる。特にこの名称が広く用いられる様になったのは12世紀も末であるとするのが定説となっていることに留意したい。
- 37) スピナソ・デ・カン (*Spinaz de Can*) : この叙事詩に挙げられているこの地名は今日では不明で、恐らくは現在のブルゴス県、*Silos* の南に位置したものと推定されている。特に *Spinaz*=*Espinazo* は *Espinazo de Can* ; *Espinazo de Perro* の様な形式で、ポルトガルにも又カタルーニアにも存在し、常に“山、峰、丘”を意味している。
- 38) サント・エステバン (*Sant Estevan*) : ソリア県、*Duero* 河畔の町で、この叙事詩の作者には特になじみの深い町であつたらしく、叙事詩全体に亘ってこの地名が頻繁に引用されている (*San Esteban de Gormaz*) 。
- 39) アルコビェリア (*Alcobiella*) : 前出の *Sant Estevan* の東に位置した一地点。本文中にもある様に、*Duero* 河以南の土地は名目上は、アルフォンソ六世に属するものであっても、事実上はモーロ人の勢力範囲であった。従って、この *Duero* 河がカスティリアとモーロ人王国との事実上の境界であった。(*Alcubilla del Marqués*)
- 40) キネア街道 (*Calçada de Quinea*) は *Uxama* と *Termancia* を結ぶローマ時代の公道で、その遺蹟は今日でも“*la calzada*”と呼ばれ、*Osma* と *Tiermes* との間に保存されている。ローマの建設した公道は、まだエル・シッドの時代には実際に用いられていたことがこの叙事詩の記述からも確認される。
- 41) ナバス・デ・パロス (*Navas de Palos*) は現在では *Navapalos* として、*Duero* 河畔、アルクビリアから8キロの所に位置する一村落である。フィゲルエラ (*Figueruela*) は今日ではその位置は定かではないが、このナバス・デ・パロスの近くにあったと想像される。
- 42) ミエデスの峯 (*Sierra de Miedes*) は *Duero* 河流域と *Tajo* 河流域とを分割する山系の一つであり、エル・シッドが配流の刑を受けた時にはこの峯がアルフォンソ六世の領地の境界をなしていた。その左手には、はるか遠くの尖峯にモーロ人の構えたアティエンサ (*Atiença*) の城塞が見え、従ってエル・シッド一行はこの城塞のはるか右手の地点に陣を張ったことになる。又この地域の記述によっても、この叙事詩の作者がこの地域の歴史的背景及び地理を正確に知っていたことが明らかになる。いわゆるアルフォンソ六世によるトレド征服の行なわれる直前のキリスト教徒とモーロ人との勢力関係を示

す一記述として、大いに価値のある一節と考えられるからである。

- 43) この場合にもエル・シッドに従う兵士の数は夫々旗じるしの付いた槍を基にして、計算されている。
- 44) カステホン (Castejón) は今日の Castejón de Henares で、Henares 河の左岸、Miedes の南40キロ程の地点に位置する。
- 45) アルバール・アルバレス (Albar Alvarez) ; アルバール・サルバドレーズ (Albar Salvadórez) : 前者は当時の資料、特にエル・シッドがその妻 doña Jimena に宛てた結納金目録によって、エル・シッドの甥として、彼に仕えた騎士であったことが明らかとなっている。後者は特に叙事詩の中では、エル・シッドの忠実な部下の一人として描かれ、エル・シッドがアルフォンソ六世と会見に臨んだ際にバレンシアの守護を任された騎士である。エル・シッドのヒメナに宛てた結納金目録によっても、又その他の資料によっても、この人物の存在したことが確認されている。
- 46) ガリン・ガルシアス (Galín Garciaz) ; el bueno de Aragón (740) との換称から想像される様に、この騎士はアラゴンの王 Sancho Ramírez と Pedro I の家来であったことが明らかにされ、当時の一資料によってもこの騎士の存在が確認されている。ここからも、エル・シッドのバレンシア征服には汎国家的な意図の下、アラゴン王国の援助もあったと考えられることになる。
- 47) フィタ (Fita) ; グアダルフエハラ (Guadalfajara) ; アルカラ (Alcalá) ; いずれも Henares 河畔に位置する町で、この河の流域はエル・シッドの軍勢により制圧されたことになる。
- 48) 五分の一の恩賞 (quinta) : 戦いの中で取得せる戦利品の五分の一がその戦の指揮をとった侍大将に分け与えられるという慣例となっていた。これは、この叙事詩とはあまり時代差なく編集された Fuero de Cuenca にも明文規定があると言われている。ここではエル・シッドは、カステホンの攻略で得た戦利品—この場合の 大将はエル・シッド 自身であったが一の五分の一をも、アルバール・ファニェスにつかはそうとするこの上もなく寛大な人物として描かれている。